2022年6月5日（日）主日朝礼拝説教

『神の息吹』井上隆晶牧師
使徒言行録2章1～13節、ヨハネ福音書14章15～17、25～27節

❶【神の息、神の風が来た】

今日は聖霊降臨祭です。復活祭、クリスマスと並ぶ三つ目の大きなお祭りです。イエス様が復活して50日目の祭りなので「五旬祭（５０日祭）」ともいい、ギリシャ語では「ペンテコステ」といいます。ですから今日は聖霊について学びましょう。霊という漢字が使ってあると、幽霊のように思うかもしれませんが、原語のヘブライ語では「ルアッハ」といい、ギリシャ語では「プネウマ」といって、もともとは「**風**」とか「**息**」という意味で「霊」という意味はありません。聖霊は神の口から出る息（風）ですから、神の性質をもっているわけです。造られたものではなく、神から出た神であって、造られた世界の上に働いて、万物と交わり浸透し、命を与えて生かし、恵みを与えて変容させ、完成へと導く力なのです。
この日、何が起こったのかを聖書からみてみましょう。
「**五旬祭の日が来て、一同が集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。一同は、聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他の国々の言葉で話し出した。**」（1～4節）
この日、天から聖霊が激しい風が吹く時のような音とともにやってきて、弟子たちの群れの上に降りました。そして炎のような舌が分かれて、一人一人の上にとどまると、彼らは聖霊に満たされ、いろいろな国の言葉でキリストのことをしゃべり始めました。ここに聖霊の特徴がよく表れています。聖霊は時や場所に合わせてさまざまに姿を変えて現れます。イエス様が洗礼を受けられた時は鳩の姿となり、使徒たちの上に降った時には、炎の舌の姿で現れました。それらはすべて聖霊の働きを表しています。鳩の姿の時はノアの洪水を思い起こさせ、イエス様こそ人々を救う真の箱舟であることを知らせるためでした。炎の舌の姿の時は、神の舌と言葉を思い起こさせ、神の言葉を世界中に語らせるためでした。

❷【上からの力をいただいて教会も人も動く】

よく、この日に「教会が生まれた」という人がいますが、そうではありません。教会は既に、イエス様が復活した日の夕べ、弟子たちに現れて息を吹きかけ「**聖霊を受けなさい**」（ヨハネ 20：22）といわれた時に創られました。ここでも既に使徒たちを中心として大勢の人が集まって祈っていたのです。これが教会です。でも教会はまだ「動き出す力」がありませんでした。イエス様は「**高い所からの力**」（ルカ24：49、使徒1：8）を受けるまでは、エルサレムを離れず待っていなさいといわれました。この上からの力が必要だったのです。

赤ちゃんが生まれた時、初めて空気を吸い込んで息をするとそれが「産声」となって、赤ちゃんは動き出します。それと同じです。人間が最初に神の手によって土から造られた時、形はできていましたが、まだ動きませんでした。動くためには「命の息」がその鼻に入らなければなりませんでした。ここでも生まれたあかちゃんの教会を「動かす」ために聖霊は下ってきたのです。動くとどうなるのか？キリストの業を受け継ぎ、宣教に出かけるようになるのです。宣教だけではありません。聖霊は自ら様々な賜物を人に与えます。聖書を作るのも、典礼を作り、教会を建て、病気を癒し、悪霊を追い出し、貧しい人を助けるのも、さらに音楽や教会芸術を作るのもすべてこの「上からの力」である聖霊がさせたのです。「**わたしは、…彼に神の霊を満たし、…すべての工芸をさせる。**」（出エジプト 31：2）と言われ、神殿の飾りや祭具、祭服のすべてを造らせたのも神の霊でした。聖書を書かせたのも聖霊です。「**聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。**」（ヨハネ 14：26）とあり、また「**聖書はすべて神の霊の導きのもとに書かれ**」（Ⅱテモテ 3：16）たとあるからです。すべては聖霊に動かされるのでするのです。人間の力でするのではありません。ここでも「**霊が語らせるままに**」（使徒 2：4）と書かれています。聖霊が語らせているのです。聖霊が動かしているのです。だから聖霊はよく「風」にも例えられるのです。風は雲を動かし、波を動かし、さまざまなものを動かすからです。

●先日、Mさんの埋葬式に行ってきました。27 歳になるお孫さんが、おばあちゃんの和子さんと「レ・ミゼラブル」を見に行って感動して涙が出たという話をされました。ジァン・ヴァルジャンが教会の燭台を盗んだ時、神父は「彼にさしあげたのだ」と警官に嘘を言って、彼をかばいました。それがきっかけで、彼は回心し、努力して市長にまでなります。彼は私に「クリスチャンの人が見ていて、これはおかしいな、と思う所はありませんか。あんなことが本当に出来るのですか？」と聞いて来られるので私はこう答えました。「人間の力でするのではなく、神様にさせられるのです。自分の命を献げて人を助けることもそうです。そうやってストーン宣教師は自分の救命具を他人に渡して海に沈んでゆきました。コルベ神父はアウシュヴィッツ収容所で、自分が身代わりとなって餓死室に送られ、一人の囚人を助けました。北海道の塩狩峠でも、クリスチャンである長野さんは暴走した列車を止めるために、線路に飛び込み、自分の身を車輪の下敷きにして列車を止め、多くの乗客を救いました。これらはすべて神に動かされてしたものです。でも、いざという時に神様に動かされるためには、普段からの準備が必要だと思いますよ。」

❸【一生祈りながら聖霊に動かされる準備すること】

聖霊に動かされるためには、人の側にも準備が必要だと思います。使徒たちは「**心を合わせて熱心に祈っていた**」（使徒 1：14）と書かれています。祈りというものがものすごく重要になってくるのです。祈りは心を耕すことです。よく耕された

土地は100倍の実を結びますが、かたい土地では実を結べないのです。聖霊が来ても、入らないのです。「**世は、この霊を見ようとも、知ろうともしないので、受け入れることができない**」（ヨハネ 14：17）と主が言われたように、求める者にだけこの霊は来てくださるからです。コルベ神父は普段は、短気で、がんこな人だったようです。ストーン宣教師は普段は目立たないとても静かな人で、暴飲暴食をせず、何事も控え目な人だったそうです。でも彼らの共通点が一つだけあります。毎日神に祈り、神と交わっていたということです。コルベ神父は最初から立派な人であったのではなく、徐々に殉教者コルベ神父になっていたのだとある本の中に書かれてありました。

●2世紀にキプリアヌスという人がいました。彼は殉教が怖くて避けていながら、それが不満で「どうして自分はあの苦しみの中に入って行けないのだろう」と殉教を慕って苦しんでいました。そんなことを何べんも繰り返しているうちに、避けるのと慕うのがぶつかり合い、その中にあって不思議とキリストの姿を理解してゆき、徐々に聖霊が満ちてきて、遂に彼は殉教します。彼の弟子のポンティウスは、「なぜ先生はあんなに苦しまれるのだろう」と、1年間じっと先生を見続けます。そして聖霊が満ちて来るまでの時間を「聖なる時間」と彼は呼んでいます。ポンティウスはこう書いています。「先生は美しい澄んだ目をしておられた。憂いがあるようで、しかも慰めがあり、形の調和や着物の柄まであの人にあっていた。」そうしてポンティウス自身もその先生の後を追い、殉教していきます。

牧師は試験に合格し、按手を受けたからと言ってすぐに牧師になるのではありません。長年大勢の人と関わり、失敗を重ね、苦しんで神に祈り、その祈りの中で心が耕され、こだわりという石が取り除かれ、柔らかい土地になり、一生かかって聖霊が満ちて来て牧師になってゆくのです。皆さんも同じです。

呼吸は一度だけでなく何度もしなければなりません。起きている時も寝ている時も人は息をします。寝ている時に息をしない症状を「無呼吸症候群」といいます。信仰の「無呼吸症候群」もあるのです。一週間に1日、礼拝の時だけ聖霊の息を呼吸する人のことです。聖霊という神の息は何度もしなければなりません。息が出て行けば、人も動物も死に、動かなくなります。私はペットの愛犬が目の前で死ぬのを見ました。息をしなくなると、体はすぐに硬くなり、冷たくなり、やがて腐敗してゆきます。息をしている限り、人は死なないのです。私たちのこの世の息が終わっても、聖霊という神の息を持っているなら死にません。イエス様は「**父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる**」（ヨハネ 14：16）といわれました。聖霊が私たちの中に永遠に共にいてくださるなら、私たちは死なないのです。聖なる生活を抜きにして聖霊に満たされることは決してありません。たえず祈り、聖霊という神の息吹を吸って、この世では聖霊に動かされる者となり、来世では永遠に生きる者にさせていただきましょう。